

YMCA Camp 100 Stories vol. 11



北九州の地に キリスト教に基づく YMCA運動を広げたい

藤本 新二

Fujimoto Shinji

元北九州YMCA総主事

▼ YMCAとの出会い

私がYMCAと出会ったのは、1956年の熊本大学に在籍中のことでした。3年生のときに、熊本の白川で大きな水害があり、沢山の子ども達が被災し困難な生活を余儀なくされました。その時、同級生の親友井立田栄君（元鹿児島県教育次長）の誘いで、熊本YMCAが行っていた白川大水害の生活支援ボランティアに参加したことがYMCAと私の出会いでした。この活動の中で、子どもたちの学習・生活面の指導やキャンプに携わり、そのことがきっかけとなりYMCAの活動に関わるようになりました。

大学4年生の時には、法の細の目から漏れている沢山の人がいることをYMCA体験を通して学び、目指していた弁護士を諦め、その年の12月25日に井立田君と一緒に洗礼を受け、私はYMCAの職員として働くことを決断しました。

この頃は未だ、障がい児者が差別を受けていた時代でしたが、熊本が白川大水害に見舞われた年に、熊本YMCAが身体障がい児キャンプと知的障がい児キャンプを開催し、私もカウンセラーとして参加しました。また、YMCA入職の翌年には日本YMCA研究所に1年間入所、夏の実習は京都YMCA佐波江キャンプ場でした。ここでも各種障がい児者キャンプに参加、障がい者問題に関する貴重な体験学習をすることができました。

▼北九州 Y M C A とキャンプ

私が Y M C A に入職してから数年後、1964 年の東京オリンピックに向けての研修のために東京 Y M C A 山手ランチで働いていましたが、1963 年の北九州五市（門司・小倉・戸畑・八幡・若松）合併に伴う門司・小倉 Y M C A の発展のために日本 Y M C A 同盟北九州駐在主事として、3 年間北九州に出向することになりました。既に北九州に赴任していた小林道彦氏（後の東京 Y M C A 総主事）のアシスタントでした。

北九州 Y M C A 赴任当時、門司 Y M C A の青年部が 10 数各部あり、300 名余りの会員がいました。小林道彦主事の指導の下、母子・父子家庭や施設の子も達のために夏はキャンプ、冬はクリスマスパーティを開催していました。費用は、その都度青年部が主催したダンスパーティの収益金が充てられました。当時の北九州は「治安が悪い」というイメージだったので、私は早く東京に帰りたいと内心感じていました。しかし、「北九州にきた目的を考へろ！」と守田道隆理事（元八幡市長）からのお叱りを受けました。この街に青少年教育を広めていくには、3 年という時間ではなく、しっかりと北九州の地に腰を据えて地域との関わりを深めていくことが重要であるということに気づかされました。そこで、日本 Y M C A 同盟に頼み、駐在主事から専任主事になり、北九州の街に Y M C A 運動を広めていくことを強く決意しました。

当時の北九州は、子ども会活動が活発に行われていました。その中で日本の Y M C A は指導者やカウンセラー等の初動的役割を担っていました。私の赴任前から、旧八幡市の公民館や社会教育分野のグループワーカーの養成に永年にわたり関わっておられたのは、奈良常五郎氏（元神戸 Y M C A 総主事）や宮林茂晴氏（神戸 Y M C A 主事）など他の Y M C A 関係者だったので、私共はその後任の役割を任されました。そういった背景から北九州 Y M C A のキャンプとレクリエーション活動は広がりを増していきました。また、北九州市の委託を受けて運営を始めた皿倉山キャンプ場で、青少年対象のキャンプやボランティアリーダー養成活動も行っていました。

当時はキャンプだけではなく、水泳教室への参加者も多く、戸畑区の若戸スプール・現市庁舎前の公園にあったプール・大里のプール、そして門司港のプールで夏期水泳教室が開催され、明治学園や西南女学院のプールでも生徒の講習会を開きました。職員とボランティアリーダー達はキャンプ場と各地のプールを往復する毎日でした。超多忙な毎日でしたが、北九州 Y M C A の役員や教会の牧師に支えられて、職員とボランティアリーダーはやり甲斐と夢を持ってメンバーと関わり続けてくれました。ボランティアリーダーの役割を春と夏の休み期間に担ってくれたのは、私が東京 Y M C A 山手学舎の舎監をしていた頃の、北九州出身の山手学舎学生とその友人達もいました。ボランティアリーダーの役割を担ってくれたメンバーの中には、後に Y M C A 主事として活躍した黒田孝之君（後の北海道 Y M C A 総主事）・安東邦昭君（後の北九州 Y M C A 総主事）・菅中正博君・山部聡君や高橋進君・薬師寺順一君等、沢山の若者が輩出されています。

また、北九州 Y M C A の理事であった山岡浩一医師の指導で、北九州市では初めての障がい児と非障がい児のインテグレーションキャンプが開催されました。山岡医師の指導の下で実施計画と中心的役割を担ったのは、神戸 Y M C A から赴任していた阪崎健治朗氏でした。この先導的プログラムは各界に多大な影響を与え、現在も続いています（北九州では 2006 年に終了）。

これらの Y M C A 活動に参加した若者の中には、北九州市の障がい児者支援活動や高齢者等の福祉分野に関わる仕事に従事している者も多くいます。1981 年の国際障がい者年を中心に、私は 1980 年の「障がい者年を考える会」、1981 年の「国際障がい者年」そして「障がい者年後の 10 年」の全ての北九州市委員会委員長として活動を行いました。また、1982 年には発起人として「北九州市障がい福祉ボランティア協会」を設立し、保田井進氏（当時は西南女学院短大部教授・後に福岡県立大学学長）を会長に推し、活動を支えました。

▼アメリカキャンプで経験したこと

心に残っているのは、全国 Y M C A のホテル学校と英語学校の学生、福岡県・熊本県の中高等学校英語教師を引率して、アメリカを横断する研修とキャンプに団長として数回行ったことです。その研修の中で、ケンタッキー州のルイビル大学で勉強をする機会があり、アパート暮らしを経験しました。地元の方々は、突然訪れた私にとっても親切な対応をしてくれました。「ようこそ！ケンタッキー州へ。これ使ってください。道具はまた帰る時に返してくれたいですよ！」と優しく接してくれ、各家庭で布団や調理道具などの生活用品を持ちより貸してくれました。国も違う見ず知らずの私を温かく迎え入れてくれたことで、楽しい毎日を過ごすことができました。このキャンプを含む合宿研修は、どんな人にも親切に向き合う大切さを身に染みて感じることできるものでした。その折りに、同一地域で生活している人々の交わりを強め深めるために行われていたポトラックパーティ（料理を持ち寄って楽しむ会）やアズユアーパーティ（仲間内の会）の体験は、日本に帰国してからの私の地域づくり活動に大変役立ちました。その他にも、旧小倉市との姉妹都市ワシントン州タコマ Y M C A キャンプやコロラド州エステスパークでのキャンプ体験の素晴らしさは、今も心に刻まれています。

▼平和への想い

私は戦時中に韓国で生まれ、終戦後に日本に帰国をしました。家族が戦争で苦労した経験があり、平和教育を大切にしたいと考えています。平和から生まれる人と人を結ぶ力は、国境の壁を越える力を生み出すこともあります。例えば、日本とトルコの関係で、1890 年の「エルトゥールル号遭難事件」があります。和歌山県の沖で遭難したトルコ船の乗組員を救助しました。その後、明治天皇の指示により、日本海軍が乗組員をトルコまで送り届けたことがあります。

時は流れ、1985 年のイラン・イラク戦争での出来事。イラクのサダム・フセインは、イラン上空の航空機に対する期限を定めた無差別攻撃宣言を行いました。各国は期限までにイラン在住の国民を軍用機や旅客機で救出したものの、日本国政府は自衛隊の海外派遣不可の原則のために、航空自衛隊機による救援ができませんでした。

さらに、当時日本で唯一国際線を運航していた日本航空は「イランとイラクによる航行安全の保証がされない限り臨時便は出さない」とし、在イラン邦人はイランから脱出できない状況に陥りました。野村豊イラン駐在特命全権大使が、トルコ側に窮状を訴えたところ、「わかりました。ただちに本国に求め、救援機を派遣させましょう。トルコ人なら誰もが、エルトゥール号の遭難の際に受けた恩義を知っています。ご恩返しをさせていただきます。」と答え、全員トルコ経由で無事に日本へ帰国できたという出来事があります。

第二次世界大戦敗戦前の日本の姿を全て悪者扱いするのではなく、このように世界社会の平和、地域の発展そして人々の生活と生命を守った世界に誇るべき沢山の日本人先達がいたことを、現代の若者達にもっと伝え見倣うことを願っています。

思いやりの気持ちや人を尊敬する気持ちを育むことで、平和への想いを子どもたちへ広げ、争いのない世界を作っていきたいと考えています。

▼これからのY M C Aに期待すること

Y M C A はキリスト教の理念に基づいた活動を行っていますので、Y M C A に関わるスタッフがキリスト教の考えやものの見方ができるようになることが大切であると考えています。キリスト教の思想に基づいたキャンプを行うためにも、日曜日には教会へ行き牧師さんの説教を受けることが必要であると感じています。

また、Y M C A 運動は人との関わりを深めていくことで広がりを増していきます。地域全体で運動を展開することがこれからのY M C A に求められてきていると感じています。Y M C A の活動を共に支える理事の方々にも活動に関わる機会を増やすことで、運動を大きくすることができると考えています。

Profile



1935年 韓国ソウル市生まれ。
1959年 熊本大学卒業後に熊本Y M C A に奉職
1963年 東京Y M C A ・日本Y M C A 同盟経由で北九州Y M C A に赴任
1976年 日本で最初の障がい児と非障がい児のインテグレーションキャンプなどのプログラム開催
1992年 退職後は北九州市を中心とした国際・福祉・環境教育等の分野のボランティア活動に関わる。
現 在 N P O 北九州市レクリエーション協会会長
北九州市地域福祉振興協会会長
社会福祉法人北九州あゆみの会 理事長（身体障がい者10施設の運営）

（文責：北九州Y M C A 内海 友貴）